

自己間整合における会話要因の検証

森崎智大

指導教員 出馬圭世

研究背景

社会心理学では、自己認識 (self-view) が社会的相互作用によって変化することが報告されてきた。近年、会話を通じて他者同士の自己認識が収束する現象として「自己間整合 (Inter-Self Alignment; ISA)」が提唱され、会話が自己認識の変化を引き起こす可能性が示されている。これに対して、自己間整合が統計的アーティファクトによって生じた可能性も指摘されており、会話が自己間整合に与える影響については議論が続いている。

研究目的

本研究の目的は、会話が自己間整合に与える影響を、複数の先行研究データを統合した分析によって再検討することである。特に、実験者要因や基準となる自己間距離といった会話以外の要因を統制した場合においても、会話が自己間整合に影響を与えるかどうか、またその効果の大きさを明らかにすることを目的とした。

研究方法

本研究では、会話要因を独立変数、ISA を従属変数とし、基準 ISD および実験者ダミーを統制変数として分析を行った。分析には、会話あり条件・会話なし条件を含む3つの先行研究データを統合し、ペア単位を分析単位とした線形混合モデルを用いた。また補足分析として、会話なし条件の2つのデータについても、基準 ISD を統制した重回帰分析を行った。

分析結果

分析の結果、基準 ISD および実験者要因を統制した上でも、会話あり条件は会話なし条件と比較して有意に大きな ISA を示した。また、基準 ISD は ISA に正の影響を与えており、初期の自己間距離が大きいほど整合が生じやすいことが示された。これらの結果は、会話が自己間整合に対して独立した影響を持つ可能性を示唆している。

考察・結論

本研究の結果から、自己間整合は統計的アーティファクトのみでは説明できず、会話という社会的相互作用がその発生を促進する可能性が示された。ただし、実験デザインやデータ構造の違いによる制約も存在するため、結果の過度な一般化には注意が必要である。今後は、より厳密な統制条件を備えた実験や縦断的研究を通じて、会話が自己認識に与える影響のメカニズムを検討することが求められる。